琉球大学学術リポジトリ

宜野座村における農業情報メディアの普及と農民の態度(農学科)

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農学部
	公開日: 2008-02-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 古謝, 瑞幸, Koja, Zuiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/4574

宜野座村における農業情報メディアの普及と農民の態度

古　謝　瑞　幸*

Zuiko KOJA: Development of agricultural information and attitude of farmers in Ginoza-son to the media.

I はじめに

琉球における戦後の農村の大きな変貌の1つはマス・コミュニケーション　メディアの発達である。それは交通網と通信網の発達を前提として普及する[7]といわれている。電波メディアとして新しくテレビジョンが現われ，ラジオは有線，無線の形で著しく増大した。また，印刷メディアとして新聞，雑誌，書籍なども多量に普及してきた。今日，都市と農村の差こそあれ，これらマス・コミュニケーション　メディアは成長するにつれ，われわれの眠っている以外の多くの時間をしめるようになってきた。

マス・コミュニケーションによる報道は農民の生活にとって不可欠のものである。毎日の天気予報，内外の市場の物価の上下，生産コストを軽減するための新技術，さらには政治情勢，生活に必要な法令や規則の改廃の報道にいたるまで，直接間接に重要である。もし，そのような情報が与えられなかったら，たちまち不安を感じたり，誤った認識をもったり，ひいては農業の生産や経営面で遅れをとることになる。今日の農民はどうしてもラジオ，新聞，雑誌などのマス・コミュニケーション　メディアを台所や茶の間まで引込み，毎日，毎日，それに基づいて行動するのでないと，たえず激しく変化する世界に生きてゆくことはできないであろう。

情報は2つの異なったコースを通して農民に伝達される：その1つは電波や印刷物などのインパーソナル・メディア；他は個人間の意志伝達の形式，即ちパーソナルのメディアを通してなされる。[1]

普及事業は多くの人を対象として知識や技術を向上せしめるために，いろいろの情報を流すのであるが，それには電波メディアと印刷メディアが頻繁に用いられる。琉球政府と琉球大学の普及機関から農業と生活改良のための逐次刊行物が出版されて全琉の農家に配布される。また，民間団体のスポンサーとラジオ放送会社の協力による農村向けの教育プログラムは年間を通じて毎日電波にのって全琉の農家に伝達される。テレビジョンもラジオ同様2つのネットワークがあるが，現時点では農業教育のプログラムは取扱っていない。代表的な2大新聞社が那覇市にある。これらの新聞社から発行される朝夕刊のニュースは全琉の隅々まで運び届けられて，農村教育の大きな役割を果している。いくつかの日本本土の中央紙も輸入されているが，農村では特定の団体を除き，家庭で購読するのは殆どないといってもよかろう。更に本土からは農業関係の雑誌も多量輸入されている。ローカル出版物としては前述したものの他に琉球列島米国民政府，農協団体，林業団体，農業試験場などから発行される逐次刊行物，パンフレット，新聞などがある。

普及事業を推進していく上に最も肝心な事の1つは情報活動に関する正しい認識をもつことである

* 琉球大学農学部協同普及事業研究室

と考える。即ち，どんな情報メディアがどれだけ普及し，それから伝わってくるいろいろな情報を農民がどのように受け入れ，どんな反応を示しているかを知ることである。

それについて今回は調査方法にも述べてある通り，いろいろの角度から検討して宜野座村を調査対象に選定し研究を試みることにした。この調査の結果が琉球の普及事業の推進にいささかでも役立てば幸いである。

この調査を行なうに当り，特にアンケートのつくり方から総体的な調査の方法について指導助言を賜ったミシガン州立大学文化人類学研究室の Dr. Daniel D. WHITNEY や調査結果の考察の方法について助言して下さった琉球大学社会学科，大田昌秀助教授に対し深謝の意を表する。また，調査現場の宜野座村においては与儀実清村長を初め多くの役所職員には有益な参考資料を提供して下さるなどいろいろと積極的に便宜を図って下さった。アンケートの配布，回収に協力して下さった各部落会長やそれに心よく応答して下さった農家の皆さんにも謹んで感謝の意を表する。

II 宜野座村の概況

1. 自然的条件

宜野座村は行政上は沖縄本島北部地区に属するが，地理的には殆どその中央部に位置する。東は太平洋岸となり，南は金武村，西北は恩納村と名護町，北東は久志村とそれぞれ隣接する。西には恩納村と名護町との境界を画する一連の山脈が走り，それはガラマン岳，宜野座岳，松田岳などからなっている。これらの岳の裾はゆるやかな傾斜となって村の母体を形成し，太平洋岸にのびている。主な河川として漢那川，宜野座川，松田川があり，いずれも村を横断して海岸に出る。

村の総面積は 279,383 a である。その内訳は田 4%，畑 15%，宅地 1.2%，山林 66%，原野 8%，残りは保安林である。大部分は山林と原野からなっている。また，総面積の約 63%，山林の約 80%は軍用地として使われている。

2. 社会的条件

宜野座村は 1946 年 4 月 1 日，金武村から独立した。行政区域は南端の城原から漢那，福山，惣慶，宜野座，松田の 6 か部落が北に続いている。

終戦直後，10 万人に近い人が同村にいた。その大半は戦災をさけるために中南部から移動してきたいわゆる避難民である。米軍は直ちに松田，宜野座，惣慶，福山，漢那の各部落に市役所をおき，各市には警察署，病院，高等学校などを設立した。

1945 年 11 月下旬，避難民は地元へ引上げるようになり，人口は次第に減っていった。その結果，5 つの市が統合されて宜野座市となり，警察，病院，高等学校も同じように統合された[6]。

1963 年 10 月現在の調査による

Table 1. Number of households and population by occupation of Ginoza-son (Oct., 1963).

Occupation	Households	Population
Agriculture	632	3,191
Fishery	9	72
Commerce	12	88
Manufacture	2	10
Transportation	10	48
Service	9	74
Public employee	36	172
Military employee	23	124
Others	16	98
Total	739	3,877

* 宜野座村村勢要覧より

と全村の世帯数は805戸で，人口は4,119人となっている。村人の職業は農業，水産業，商業，工業，製造業，運輸業，サービス業，公務員，軍作業と多岐にわたっているが，農業は全世帯数の約80%をしめている(Table 1 参照)。

次に村内における主な公共機関としては学校関係では小学校3，中学校1，高等学校1で計5校ある。その他では北部農業改良普及所宜野座支所，農業協同組合，宜野座地区教職員事務所，郵便局，巡査駐在所，保健所出張所，診療所，登記所などがある。

また，普及事業の推進母体として16の自主団体が結成されている。それは生活改善グループ14，農研クラブ1，4Hクラブ1となっている。部落民の文化センターとして各部落に公民館がある。

1962年，村営電気工事が完成し，全村一戸ももれなく配電され，村民の文化生活と産業開発に一大エポックをマークするに及んだ。

交通網として筆頭に上げられるのは軍用路13号線である。金武村境界から村を縦断して久志村に通じるこの幹線は，幅員16m，長さ8,900mに及ぶモダンのアスファルト道路である。沖縄本島南北を結ぶ東側の幹線として，バス，トラック，タクシー，その他あらゆる種類の車輛の往来が頻繁で，同村の産業，経済，文化，教育など多くの分野に貢献しているといえよう。村の中心から車で那覇へ約2時間，名護へ約35分間で達することができる。

村の西部山林地帯を横断する幅員4～5m，長さ1,500～1,800mの軍用道路が3本あるが，戦前，戦後を通じて山地開発の幹線として大きな役割を果している。村の北端の政府道108号線は幅員6m，長さ3,550mで，13号線と1号線（西線）を結ぶ，沖縄本島の主な横断道路の1つである。また，網の目のように農道が整備され，サトウキビやパインの生産に拍車をかけている。

3. 村の産業

宜野座村は戦前，戦後を通じて純農村である。基本産業はなんといってもその立地条件をいかしたサトウキビとパインの栽培である。村当局の生産向上の政策と村民の開拓精神が有機的につながって，広大な荒蕪地の解消と山地開発が実現し，特に開こん地に見られるパイン畑は全琉的にも屈指の存在とされている。また，従来の自給農業から脱皮して，換金農業へ変貌しつつあるが，時代の流れ

Table 2. Number of farm families by full-time and part-time.

Buraku	A	B	C	D	E	F	Total	%
Full-time	23	26	12	25	45	37	168	26.2
Part-time	21	98	31	76	110	136	472	73.8
Total	44	124	43	101	155	173	640	100.0

1964年農業センサス報告より

Table 3. Variety and cultivation of main crops in Ginoza-son (1963).

Crops	Cultivated acreage
Sugar-cane	17,000 acre
Rice	16,850 〃
Sweet potato	3,692 〃
Pineapple	4,908 〃

宜野座村村勢要覧より

Table 4. The average farm land per farm family.

unit: are

No. of farm families	Total cultivated land			Average land		
	Paddy	Upland	Total	Paddy	Upland	Total
632	11.149 a	41.765 a	52.911 a	17.6 a	66.1 a	83.7 a

1. 1 are equals 0.025 acres
2. 1963 年村勢要覧より

Table 5. Number of domestic animals by year.

	Cattle	Horses	Hogs	Goats	Poultry
1960	68	114	1,347	753	627
1961	99	127	1,559	613	3,171
1962	74	100	1,285	496	2,976
1963	63	102	1,101	825	5,213
1964	28	77	2,252	856	11,265

村役所資料より

として当然であろう。他の主要作物として水稲や甘藷がある。

また，畜産も同村の基本産業の一面である。特に，豚と鶏の多頭羽飼育を経営する農家が増え，周囲の農家にも大きな刺激となっている。村の年次計画によって豚と鶏は年次目標をはるかに上回っている。1963 年に設けられた年次計画に対し，1965 年 3 月現在，豚が 130.9%，鶏が 182.6% に達している。牛は対照的に 35.7% の低率である。

III 調査の方法

1. 調査対象の選定について

まず，琉球の農村を形態的に3大別し，その中の最も一般的なタイプの中から1村を選定して調査対象にすることにした。その形態とは，① 都市からかけ離れた純農村 ② 都市に接近しているけれども農業を主体とする農村，③ 都市に接近し，都市化した農村である。 その中最も一般的なタイプは ① である。筆者は次の諸観点から宜野座村を選定した。

1) 宜野座村は都市からかけ離れた最も一般的な純農村の1つである。
2) 宜野座村は地理的に沖縄本島の殆ど中心部に位置する。
3) 琉球の基本産業であるサトウキビとパインの栽培が主体である。
4) 琉球の最も一般的な平地農業の立地条件をもっている。
5) 交通および通信網の発達の度合が一般的である。

2. アンケートの作成

アンケートの作成に当っては特に次の諸点に注意を払った。

1) 安心して卒直に応答できるように回答者の氏名の記入は自由にした。
2) 義務教育を受けた農民をレベルにして質問事項を作成した。
3) 回答者の手間をはぶき，気軽に応じられるように答の欄はチェック式にした。

4）回答者は必ずしも戸主ではなく，その家庭で最もよく農業情報をとり入れて消化吸収し，自ら農業に従事するか，またはそれについて指導助言できる家族の一員ということにした。

3. アンケートの配布と回収

1）アンケートの配布と回収に当っては各部落会長の協力を得た。

2）アンケートは村の全農家に配布した。

3）アンケートの回収率は全農家戸数640戸の中 64.8%（415戸）に達した。

Table 6. Number of farm families and questionnaires collected.

Items \ Buraku*	A	B	C	D	E	F	Total
Farm families	44	124	43	101	155	173	640
Questionnaires	40	87	24	76	85	103	415
%	90.9	70.1	55.8	75.2	54.8	59.5	64.8

* Buraku means community.

4. 調 査 期 間

アンケートを配布した日から回収を終る日までを調査期間として3か月間を要した。（1965年9月1日——11月30日）

5. 調 査 項 目

現在琉球の農村に普及して農業関係情報を流す主なマス・コミュニケーション・メディア——テレビジョン，ラジオ，新聞，逐次刊行物その他について調査した。

IV 調査結果および考察

1. テレビジョン

テレビジョンは多くのマス・コミュニケーション　メディアの中でもっともおくれて出現したが，その機能の点ではもっとも優れたものである。将来のマス・コミュニケーション活動でもっとも威力

Table 7. The results of questionnaires on television.

Question	Answer \ Buraku	A	B	C	D	E	F	Total	%
1. Do you have a TV set?	Yes	17	61	15	46	48	59	246	59.3
	No	22	24	10	29	28	31	144	34.7
	No answer							25	6.0
	Total							415	100.0
2. Do you want agricultural programs on TV?	Yes	29	71	16	55	65	69	305	73.5
	So so	0	1	1	3	1	2	8	1.9
	Don't know	1	6	1	5	0	4	17	4.1
	No answer							85	20.5
	Total							415	100.0

Table 8. Number of radio and television sets in Ginoza-son (Oct., 1963).

Items \ Buraku	A	B	C	D	E	F	Total
Households	45	160	45	110	224	220	804
No. of radio	28	111	43	92	158	171	603
%	62	70	96	77	73	83	75
No. of TV	13	41	3	22	56	59	194
%	29	26	7	19	26	27	24

宜野座村村勢要覧より

を発揮するのはこのテレビジョンであろうといわれている。宜野座村におけるテレビジョンに関する調査結果について考察しよう。

1) あなたの家はテレビジョンがありますか(Table 7の質問1参照)。

第7表に示すように調査農家415戸の中，246戸即ち59.3% がテレビジョンをもっている。これは1963年10月現在の普及率24.1% と比較すると約2.5倍の増加である。それからするとテレビジョンの台数はもっとふえることがうかがえる。

1965年7月現在の沖縄テレビの調査結果によると宜野座村の普及率は48.3% となっている。これは筆者の調査結果より11% も低い。その理由は沖縄テレビの調査は職業に関係なく村の全世帯を対象とする悉皆調査であるのに対し，筆者の場合は農家の中でもその65% を対象としているからだということが考えられる。沖縄本島市町村別テレビジョン普及率の平均は62.7% (沖縄テレビ調査，1965年)で，宜野座村の普及率よりも上回っている(Table 8, 9 参照)。

2) テレビジョンにも農業関係番組はあった方がいいですか (Table 7の質問2参照)。

この問に対し，415人の中305人 (73.5%) がそれを希望している。この数字はテレビジョン保有者の数を上回っているが，多くの農家がテレビジョン講座に深い関心を示している証拠であろう。目下行なわれているNHKの学童対象の教育放送のように，農民教育を目的とした番組が提供できようものなら，農村改革の上に大きな効果をもたらすであろう。現在，コマーシャルの生活改善講座番組(特に料理)はあるが，正規の普及教育の目的をもったものはない。

2. ラ ジ オ

1865年，イタリアのマルコニーによって初めて成功したラジオ放送は，70年後の今日，有力なマス・コミュニケーション メディアとして飛躍的な進歩をとげるに至った。今や沖縄においても都市，農村をとわず，避地の山間部落から孤島に至るまで，ラジオが普及していない所はない。

ラジオ沖縄の行なった1965年の調査によると全琉球のラジオの普及台数はカーラジオを除いて204,272となっている。これを種類別にみると，ホームラジオ46.3%，トランジスターラジオ31.9%，親子ラジオ21.8% となり，最も多いのがホームラジオである。また，地区別の普及台数の比率を見ると那覇30.5%，中部28.7%，南部13.6%，北部12.6%，宮古，八重山各7.3% となっている。都市地区に集中し，地方から離島にいくにしたがって普及率が低い (Table 10 参照)。

宜野座村は全琉の12.6% の普及率をしめる北部地区の1村である。ではアンケートの調査結果にもとづいて，次の4点から考察しよう。

1) あなたの家はラジオがありますか (Table 11の質問1参照)。

415戸の中，86.5% はラジオをもっている。もっていないのが8.7% で，残りの約5% は無回答である。これからすると殆どの農家がラジオをそえつけていることがわかる。

Table 9. Number of television by SHI, CHO and SON in Okinawa Islands.

Shi, Cho, Son	No. of TV	House-holds	%	Shi, Cho, Son	No. of TV	House-holds	%
Tomigusuku-son	1,227	1,998	61.4	Kadena-son	1,900	2,987	63.6
Itoman-cho	1,765	3,164	55.8	Chatan 〃	987	1,951	50.6
Kanegusuku brcnch	423	1,230	34.2	Kitanakagusuku 〃	881	1,712	51.5
Miwa 〃	807	1,825	44.2	Nakagusuku 〃	794	1,901	41.8
Takamine 〃	384	779	49.3	Ginowan-shi	5,000	7,791	64.2
Kochinda-son	1,165	1,772	65.7	Nishihara-son	776	1,829	42.4
Gushichan 〃	615	1,251	49.2	Urasoe 〃	3,400	6,632	51.3
Tamagusuku 〃	950	1,782	53.3	Central. District	35,822	62,219	57.6
Chineu 〃	405	1,064	38.1				
Sashiki 〃	670	1,539	43.5	Kunigami-son	280	1,874	14.9
Yonabaru-cho	976	1,749	55.8	Ogimi 〃	250	1,414	17.7
Ozato-son	630	1,329	47.4	Higashi 〃	100	617	16.2
Haebaru 〃	1,139	1,808	63.0	Haneji 〃	800	1,885	42.4
Total of				Nakijin 〃	647	2,750	23.6
Southern District.	11,156	21,290	52.4	Kamimotobu 〃	100	1,022	9.8
				Motobu-cho	210	2,993	7.0
Nakazato-son	218	1,535	14.2	Yabu-son	356	851	41.8
Gushikawa 〃	200	1,274	15.7	Nago-cho	2,300	4,106	48.7
Tokashiki 〃	52	235	22.1	Onna-son	452	1,545	29.3
Zamami 〃	55	356	15.4	Kushi 〃	474	1,129	42.0
Aguni 〃	65	530	12.3	Ginoza 〃	392	812	48.3
Tonaki 〃	30	273	10.9	Kin 〃	819	2,079	39.4
Total of remote				Ie 〃	700	1,474	47.5
Islands in				Iheya 〃	35	621	5.6
Southern District	620	4,203	14.8	Izena 〃	120	910	13.2
				Yagaji 〃	167	528	31.6
Ishikawa-shi	1,900	3,317	57.3	Total of			
Misato-son	2,200	4,292	51.3	Northern District	8,202	26,610	30.8
Yonashiro 〃	1,300	2,932	44.3				
Katsuren 〃	984	2,191	44.9	Naha-shi	53,000	59,263	89.4
Gushikawa 〃	3,500	6,905	50.7				
Koza-shi	10,200	14,039	71.2	Total	108,800	173,585	62.7
Yomitan-son	2,000	3,740	53.5				

Namber by district

District	No. of TV	%
Naha	53,000	48.7
Southern	11,776	10.8
Central	35,822	32.9
Northern	8,202	7.6
Total	108,800	100

* 沖縄テレビ 1965 年 7 月現在調査より

Table 10. Number of radio sets in the Ryukyus (1965).

Radio \ District	Yaeyama	Miyako	Southern Okinawa	Naha	Central Okinawa	Northern Okinawa	Total	%
Home radio	4,700	2,030	9,840	36,890	36,210	4,870	94,610	46.3
Transister radio	4,980	7,420	6,560	20,450	12,310	13,350	65,070	31.9
Wire radio	5,172	5,469	11,374	4,864	10,162	7,551	44,592	21.8
Total	14,922	14,919	27,774	62,204	58,682	25,771	204,272	
%	7.3	7.3	13.6	30.5	28.7	12.6		100.0

* ラジオ沖縄の Summary Guidance より

Table 11. The Results of questionnaires on radio.

Question	Answer \ Buraku	A	B	C	D	E	F	Total	%
1. Do you have a radio set ?	Yes	33	73	23	62	78	90	359	86.5
	No	7	73	—	8	5	5	36	8.7
	No answer							20	4.8
	Total							415	100.0
2. In a week, how many times do you listen to the morning agricultural programs ?	7	4	10	4	4	12	10	44	10.6
	4～5	7	23	8	16	18	16	88	21.2
	2～3	10	21	10	28	38	35	142	34.2
	1	2	6	0	4	6	7	25	6.0
	Not at all	11	15	1	17	8	19	71	17.1
	No answer							45	10.9
	Total							415	100.0
3. Do you understand the infomation ?	Fairly	16	37	18	40	60	43	214	51.5
	Poorly	2	13	2	6	8	10	41	9.9
	Not at all	4	9	0	12	2	9	36	8.7
	No answer							124	29.9
	Total							415	100.0
4. Have you applied any of the agricaltural information ?	Yes	15	39	18	30	51	34	187	45.1
	No	16	23	3	33	13	40	128	30.8
	No answer							100	24.1
	Total							415	100.0

2) 朝の農村番組は週に何回きいていますか (Table 11 の質問2参照)。

ラジオ沖縄と琉球放送の両放送局から農村向けの早朝番組として次のような題目が提供されている。

a 農漁村の皆さんへ 5: 00 a. m.

b お早よう農村の皆さん 6: 05 a. m.

c　農家のしおり　6：40 a. m.

d　農家のページ　6：50 a. m.

これらは各々異なったスポンサーによって提供され，農村教育の大きな役割を果している。aとbは主として農村生活を営む上に必要な一般的の教養面を取扱い，cとdは新しい農業技術や主婦のための生活技術が主体になっている。これらの資料は琉球政府の普及および試験機関，琉球大学農学部の普及機関，琉球農連などの関係団体から提供され，場合によっては日本本土から輸入された農業雑誌からも使用されている。

調査の結果は1週間の中，毎朝きいているのは 10.6%，4～5日—21.2%，2～3日—34.2%，1日—6.0%，全くきいてない—17% となっている。残りの 11% は無回答である。週に2～3日聞いているグループが最も高い比率をしめ，毎日のグループは約 11% である。

3）話の内容はわかりますか（Table 11 の3参照）。

これはラジオの話の内容を解っているかどうかを知るための問である。

調査の結果はわかりやすい—52%，むずかしい—10%，わからない 8.7% で残りの約 30% は無回答である。ラジオの話がわかりやすいと意識している農民は大体 50% で，残りの 50% は殆どわからないグループであろう。旧制中学卒または新制高校卒以上の学歴をもっている人はわかりやすいとするグループに含まれることは異存はないだろう。第 14 表の学歴調査によるとそのグループは 415 人中の約 16% をしめている。わかりやすいとする残りの 36% は義務教育卒業者の中に含まれていることだろう。それからすると義務教育卒業者の約半数はラジオの話をよくのみこんでいることになる。放送原稿のライターや解説者はこれらマジョリティー・グループの能力を念頭において仕事をなすべきである。

4）ラジオの話を農業に応用したことがありますか（Table 11 の4参照）。

415 人の中，かつてラジオの話を農業に応用したことのある人は 45% で，ないのが 31%，残りの 24% は無回答である。

この問題は 2）や 3）と関連するもので，特に 3）とは密接な関係がある。即ちどんなにすばらしい新技術に関する話でも，内容や解説に難点があると，聴取者は努力してまでそれを受け入れようとしないからである。もう一つ大事なのは内容が聴取者または学習者にとって実際的で，かつ彼等の必要や興味に適合しているかどうかである。各放送局で取扱っている資料は衣食住，教育，環境衛生などの一般的な問題から，主体の農業技術に至るまで，広範囲の分野にまたがっている。415 人の中，187 人は何かの応用を試みた経験があるということになっている。これは普及方法の1つとしてのラジオの効果を示す事例である。

ちなみに，アメリカにおける普及方法別，専門事項別応用比率の調査からラジオの果す役割をみてみよう。

この調査は土壌の他22専門事項について12種の普及方法に対する応用比率を導き出しているが，最も多くラジオの影響をうけているのは食物調理の 3.6% で，最も少ないのは家庭管理とジャガイモの 0.2% である。ラジオの影響中，最も多い食物調理といえども，12 種の普及方法の各々の最高と比べると低い部類にしか属しない。もっと簡単にいうと，ラジオを含む 12 種の普及方法の中，ラジオの話を応用したという人の数は比較的少ないということである。4）の結果と相反するような感じがするが，4）は比較調査ではないので，それと比較することはできない。

ラジオは面白がらせる方に重点がおかれる[8]といわれているように，実際には教育的効果は低いことをアメリカにおけるこの調査は物語っている。

ラジオが農民の間によく普及するのは，聞くことは読むことよりもパーソナルの行動であるので，パーソナルの温かさが受けとれるという特性に起因するだろう。職業別でみると知能労働者は，ラジ

オと新聞が殆ど同率なのに，農業者ではラジオが多く，また，6大都市，市町村と地方に行くに従い，新聞よりもラジオと答える者の率が増している[4]。宜野座村の調査でも，約 1.7: 1 とラジオの比率が高くなっている。

3. 新　　聞

知らせる方に重点をおく[8]という機能をもつ新聞は学習者としての農民にとってよい相談相手である。1回きりの電波メディアと対照的に，新聞の活字は何回でも学習できるという点に意義がある。

アメリカにおける調査によると新聞のストーリーは普及方法の一つとしてかなりいい効果をもたらしていることがわかっている。農務省発行の Extension Teaching Methods に 16 種の農業専門事項に対する 12 種の普及方法の効果比較があげられている。それによると新聞記事による影響はトウモロコシ，コムギ，ムギ，ダイズ，牧草でトップを示している。つまり，これらの作物に関する技術は新聞から最も多くとり入れたということである。

次に日本における普及事業を通じて新聞の果す役割をホリドールの普及過程を例にとってみてみよう。

Table 12. On the process of getting FOLIDOL to the farmers.

Media \ Function / Data	Telling the name		quickness		afforded better understanding	
	No.	%	No.	%	No.	%
News paper	35.0	25.9	31.5	34.0	9.0	11.9
Magazine	20.7	15.3	14.0	15.0	19.0	25.0
Radio	27.3	20.1	20.5	22.0	8.0	10.5
Extension agent	18.1	13.4	11.0	11.8	23.0	30.3
Ag. coop. technician	10.5	7.7	5.0	5.4	5.0	6.6
Village office technician	8.8	6.6	2.0	2.1	—	—
Training & exhibit	3.5	2.6	3.0	3.2	8.0	10.5
Relative	1.3	1.0	—	—	—	—
Friend	10.0	7.4	9.0	6.5	3.0	3.9
Result demonstration	—	—	—	—	1.0	1.3
Total	135.5	100.0	93.0	100.0	76.0	100.0

野村春二著　普及技術より

Table 12 に示すようにホリドールの名前を知らせたものでは新聞がトップで 26% を占め，最も早く知らせたものでも同じくトップで 34%，理解させたものでは 11.9% とややおちてはいるが，それでも 10 種の普及方法の中3位にランクしている。また，別の表でみると，66 戸の農家の中，新聞によって秋落ちの知識を知ったのは 15.2% で，その対策の方法に関しては 51 戸の中，15.7% が新聞の影響をうけている。

これを経費の面から見た場合，新聞ほどコストの割に効果が上がる普及方法はないといわれている。そして穀類，家畜，マーケッティング，食物などの専門的分野に関しては，短い記事ほど応用に効果を示すとのことである[8]。

この結果からみて，新聞記事の取扱い方はいくら注意してもしすぎるということはないといえる。それは試験場の試験成績，展示圃，講習会の報告書，農民の実績などの確固たる資料に基ずかねばならない。

では宜野座村における新聞に関するアンケート調査の結果について考察しよう（Table 13 参照）。

Table 13. The Results of questionnaires on news-paper.

Question	Answer \ Buraku	A	B	C	D	E	F	Total	%
1. Do you subscribe to a newspaper	Paper A	9	14	7	35	32	25	122	29.4
	Paper B	2	32	6	21	31	36	128	30.9
	Other	1	8	0	0	1	5	15	3.6
	Do not	26	30	5	18	14	22	115	27.7
	No answer							35	8.4
	Total							415	100.0
2. How often do you read agricultural reports?	Every time	3	20	3	16	38	17	97	23.4
	Some time	17	39	10	45	30	50	191	46.0
	Seldom	4	6	1	4	1	6	22	5.3
	Not at all	3	10	2	0	3	5	23	5.5
	No answer							82	19.8
	Total							415	100.0
3. Do you understand the news stories?	Fairly	17	29	8	47	45	40	186	44.8
	Poorly	5	16	6	8	11	21	67	16.2
	Not at all	2	8	2	3	2	6	23	5.5
	No answer							139	33.5
	Total							415	100.0
4. Which of the two do you prefer?	Successful story	11	26	14	15	32	32	130	31.3
	Technical story	14	30	5	46	28	36	159	38.3
	No answer							126	30.4
	Total							415	100.0

1）あなたの家は新聞をとっていますか。

Table 13 によると 415 戸の農家の中 265 戸（約 64%）は新聞を購読し，115 戸（約 28%）はしていないことが判明した。残りの約 8% は無回答である。265 戸の中 250 戸は地方紙の沖縄タイムズと琉球新報で占められている。残りの 15 戸は日本本土からの輸入新聞とその他であろう。

ラジオの項でも述べたように農家では新聞よりラジオの方が多いといわれているが，宜野座村の場合も同じ結果がでている。即ち 356：265 で新聞は 94 だけ少ない。

それでは，新聞をとっていない約 28% と無回答の約 8% は全く新聞に接していないのかというとそうでもない。新聞，ラジオ，雑誌から国や世界の動きを十分に知ることができない下層の農民は部落や村の有力者の口から，その空白を，あるいは不足をおぎなおうとする[4] といわれている。このように間接的に情報をとり入れるか，あるいは隣人，友人から借りて読んでいるのはよくあることである。それは農産物の価格や生産および経営技術に関しても同じである。

2）新聞の農業関係記事はどの位読みますか。

第 13 表の 2 を参照されたし。それによると欠かさずに読むのが 23.4%，時々読むのが 46%，なかなか読まないとするのが 5.3%，全く読まないのが 5.5% となり，残りの 19.8% は無回答である。時々という表現は厳密な日数を表わさないので適切ではないが，週 2～3 回と見てよいだろう。このグループが半数に近い 46% を占め，また最も大きいグループである。この比率は農家の日日の

忙しさ，記事の難易性，記事に対する興味，読解力などいろいろの要因によって左右される。しかし，同表の（3）項の“わかりやすい”45% という結果からすると，野良および家事仕事の時間的の制約や疲れによる無読が主な原因のように見受けられる。60% 余りの新聞購読者がいるのに，農村で農業関係記事がよくよまれないとうことは考えるべき問題である。忙しいから読まないではすまされない。農家には，都会人，ことにインテリ階層のような時間の観念はない。それは平常，時間を見て仕事をしているものではないからである[3] といわれているが，これは農村生活の合理化につながるものである。しかし，近年，特に普及団体が時間生活の問題をとり上げ，家庭生活や団体活動の上に好結果をもたらしていることは注目に値する。

3） 農業記事の内容はわかりますか。

これは新聞の特に地方版と産業欄に掲載される農業技術関係の記事を対象として，農民の意識を知るための質問である。記事の内容は“わかりやすい”と答えたのが 45% を占め，“むずかしい”約 16%，“わからない”約 5%，無回答約 34% となっている（Table 13 の質問 3 参照）。

Table 14. The educational background of the objective farmers.

Schools attended	Uneducated	Primary school Jr. high school	High schools, Secondary school	Colleges	No answer	Total
No.	2	250	58	9	96	415
%	0.5	60.2	14.0	2.2	23.1	100.0

これは第 14 表の学歴調査と関連して考察すると意義深い。第 14 表によると調査対象の約 60% は義務教育課程修了層でしめられ，高等学校以上の教育を受けた者は約 16% となっている。23% の無回答は一寸大きいウエイトではあるが，除外して考察せざるをえない。

16% の高等学校以上の教育経験者は，“わかりやすい”とする 45% の中に含まれることは常識として考えられる。そうすると残りの 29% は義務教育層の 60% からくることになる。これは義務教育層の約半分は農業技術関係の新聞記事をよく読解していることを示している。“むずかしい”，“わからない”とはっきり意志表示している層が約 21% いるが，これは間接影響をうける部類といってよかろう。

4） 次の二種の記事の中，どれを好みますか。

（a） 普通の農民の成功した物語

（b） 専門家の科学的な技術の話

調査の結果は（a）に属するもの 31%，（b）に属するもの 38%，無回答約 30% となっている（Table 13 の質問 4 参照）。

（a）に属するグループは一概にはいえないが，波及効果によって動く型の人々であろう。即ち普及冊子，講習会などの情報を直接参考にするよりも，成功した他人の農場の作物をみて，自分も実行するという人々である。（b）はどちらかというと意欲型である。即ち，たえず新らしい科学的な技術を求めて行動する進歩的な農業者である。この型は普及事業を通じてよく専門家を利用し，また協力する。意欲型には，経済的優位にあるもの，インテリ層，よその団体生活の経験のあるものなどがいる[3] といわれている。

無回答の 30% は無関心型と（a）に属する人々からなっているだろう。普通は（a）は一番多い型といわれている。展示圃を直接見せたり，あるいは展示圃の実績を記事にすることは（a）型の人々の技術改良に非常に効果的である。普及事業ではこれを波及効果とよび重くみている。（b）に属する意欲型が 38% もしめていることは農村の改革を意味するものとして心強い。

4. 農 家 の 友

農家の友は琉球政府農林局農業改良課から発行される技術普及を目的とする逐次刊行物（月刊）である。内容は農業一般，畜産，家政，その他の分野を取扱っている。資料は関係官庁の研究員と指導員から提供されるのが主で，先進農家や普及団体の成功談話も時々織込まれる。一般の農家が直ちに応用できるように，実際的な技術談話を平易な文章で解り易く解説が試みられている。同誌の規格はB版で，年により少々の差はあるが，毎号大体 20 ページ前後のボリュームである。活字は主として5号を用い，挿絵や写真も適当に織込まれた肩のこらない雑誌である。では Table 15 に基づいて同誌に関する調査結果を考察しよう。

Table 15. The results of questionnaires on NOKA NO TOMO.

Question	Answer \ Buraku	A	B	C	D	E	F	Total	%
1. Have you ever seen NOKA NO TOMO ?	Yes	15	37	13	32	47	49	193	46.5
	No	17	43	6	29	21	30	146	35.2
	No answer							76	18.3
	Total							415	100.0
2. How often do you read it ?	Every month	2	0	2	3	1	6	14	3.4
	2～ 3 times/yr.	12	17	10	16	30	31	116	27.9
	4～ 5 〃	8	11	4	18	11	6	58	14.0
	6～ 7 〃	0	4	1	3	5	6	19	4.6
	8～10 〃	1	5	0	1	1	2	10	2.4
	Not at all	5	17	2	14	7	11	56	13.5
	No answer							142	34.2
	Total							415	100.0
3. Where do you read it ?	Home	11	21	8	22	26	32	120	28.9
	Community Hall	13	11	10	22	12	7	75	18.1
	Village office	0	1	0	2	2	1	6	1.4
	Ag. coop. office	0	1	0	0	8	6	15	3.6
	Extension office	0	0	0	0	0	0	0	0
	Friends house	5	6	1	2	5	9	28	6.7
	Others	4	1	0	2	0	4	11	2.7
	No answer							160	38.6
	Total							415	100.0
4. Where do you obtain the bulletin ?	Extension agents	0	8	1	11	3	7	30	7.2
	Community chief	18	10	14	15	16	17	90	21.7
	Ag. Cooperative technician	0	5	1	2	4	5	17	4.1
	Village office staff	1	4	0	7	6	3	21	5.1
	No answer							257	61.9
	Total							415	100.0

(To be continued)

Table 15 の続き
(on NOKA NO TOMO)

Question	Answer \ Buraku	A	B	C	D	E	F	Total	%
5. Do gou understand the stories in it?	Fairly	14	19	12	23	27	26	121	29.2
	Poorly	8	11	4	8	13	10	54	13.0
	Not at all	4	7	4	2	0	7	24	5.8
	No answer							216	52.0
	Total							415	100.0
6. Have you applied any of the informations?	Yes	12	29	14	23	35	36	149	35.9
	No	12	24	5	21	17	27	106	25.5
	No answer							160	38.6
	Total							415	100.0
7. Are you satisfied with the number issues NOKA NO TOMO?	Increase	19	33	15	38	34	36	175	42.2
	Satisfied	4	9	2	12	5	13	45	10.8
	Don't know	4	13	1	6	6	14	44	10.6
	No answer							151	36.4
	Total							415	100.0

1） あなたは農家の友を見たことがありますか（Table 15 の質問1参照）。

415 人の中，約 47% が“ある”と答え，“ない”が 35%，無回答が 18% となっている。無回答は同誌に対する関心の不明瞭の証拠として，見たことがない部類に属しよう。この見地からすると農家の友を見た事がない農家が 50% 以上ということになる。1965 年 9 月現在，通巻 75 号まで発行され，6年以上の発行歴をもっている。代表的な農業教育の雑誌が，6年間かかっても 50% 以下の農家にしか知られていないということは，PR の不徹底を意味するものであろう。それは多分配布部数に起因するだろうが，同誌は毎月 8,000 部印刷され，その中の 60 部が宜野座村に割当てられている。同村の農家戸数は 640 戸あるので，約 10 戸に1冊の割合になる。公民館の読書室や普及団体の活動が発達している現在，今なお多くの人に認識されていないという事は残念である。また，これは特定の一部の人たちが回覧をおこたって，自分のテーブルにしまいこんでいるということも考えられる。

2） 農家の友はどの位読んでいますか（Table 15 の質問2参照）。

月刊誌農家の友を毎月読んでいるのは 415 人の中 14 人で，約 3% にすぎない。年に2～3回読むのが約 30% で最も多く，8～10 回が 2.4% で最も少ない。“全く読まない”と無回答を合わすと 198 人で，これは 1）の“見たことがない”と無回答の 222 とほぼ同数であるので，両者は同一グループであろう。よく読まれていないということは，1）で述べたように個人による独占や，読書欲の欠乏，配布部数の不足などが原因であろう。

3） 農家の友はどこで読みますか（Table 15 の質問3参照）。

この項では 415 人の中，61.5% が回答をよせている。その中，最も多いのが自宅の 28.9% で，次は公民館または部落事務所の 18% となっている。少数ではあるが，村役所や農協などでは読まれているが，普及所では 0 となっている。普及所は地方における農家の友の取扱いセンターであるので，むしろ質疑応答を兼ねた読書の機会があってしかるべきである。農家の人々は普及所を訪問して

普及員の指導助言を受けるという態度と意欲に欠けていることが前回の調査でわかった。もっと積極的に普及所を訪問する態度を植付ける必要がある。

では，どこで読ませた方が効果的かというとそれは何といっても家庭である。農民は実際問題として読書の時間を設ける必要はあっても困難である。食後あるいは仕事の余暇に何時でも読めることが望ましい。これも配布部数の拡張と読者間の循環の合理化が必要とされる。

4）誰が農家の友を届けてくれますか（Table 15 の 4 参照）。

この問に対し，415 人の中，僅か 38% しか回答をよせていない。

宜野座普及支所の資料によると，配布先は村産業課，各公民館または部落事務所，農協，生活改善グループ，農研クラブが主体となっている。最も多く配っているのは公民館であるが，それは本項の調査結果の公民館長と部落会長で約 22% という最高比率にも裏付けされている。"普及員" 7.2% と表われているが，この回答は公民館長，生改グループ長，農研クラブ長，あるいはその他の団体のメンバーで，直接普及員から配布を受ける人たちであろう。農家の友は普及員と農家の間にある技術の架橋であるので，できるだけ多く普及員の手から個々の農家へ届けられることが効果的である。

5）話の内容はわかりますか（Table 15 の質問 5 参照）。

調査の結果は 415 人の中 52% は無回答で，その他は次のように回答している。即ち，"わかりやすい" 29%，"むずかしい" 13%，"わからない" 6% となっている。新聞記事をわかりやすいとする人は 45% もいるが，農家の友はそれよりも 16% おちている。それからすると新聞の方が農家の友よりも読み易いということになる。また，"むずかしい" と "わからない" という点においては両メディアとも殆ど同率の回答を得ている。

普及冊子は技術の話題が主体となる性質上，文章も一定の型にはまった体形になりがちである。これは読む意欲を減退させることになりかねない。そのためには "やさしい言葉"，"やさしい文字" を使って "短い文"，"やさしい文" に[3] すべきである。

6）農家の友を農業や生活面に応用したことがありますか（Table 15 の質問 6 参照）。

この問は特定の記事についてではなく，かつて今までに何かの記事を応用してみたことがあるかということである。

調査の結果は 415 人の約 36% はある，約 25% はない，約 39% は無回答である。

これはどちらかというとばくぜんとした質問である。通巻 75 号（1965 年 9 月現在）の発行歴という事実の観点からすると，応用経験のある人い　はこの結果を上回ると見ることが正しい。何故ならば 6 年余りというと記憶は薄らぐからである。

7）農家の友の配布量について（Table 15 の質問 7 参照）。

農家の友の配布量はもっとふやした方がいいと答えた人は 415 人の中，約 42% をしめている。これは 1)[1] の農家の友を見たことがあるという人の数とほぼ同じである。"わからない" と無回答を合わせて 47% もしめているが，この人たちは同誌に実際に接した経験に乏しく，したがって認識していない部類と思われる。そのままの部数でいいと答えたのは約 11% である。

1）でも述べたが，農家の友は農家約 10 戸に対して 1 冊の割で配布されているので，回覧式にしても 10 日に 1 回しか見る機会はない。それも順調に動いた時の話で，終日殆ど野良仕事で過ごす農民にとって，読みたい時，何時でも読める可能性はない。実際問題として回覧式も持続性に乏しい。もっと読者数を拡張するためには，それ相当の発行部数に拡張することが先決問題である。

5. 農家便り

農家便りは琉球大学農学部から発行される逐次刊行物（月刊）である。同誌は琉球大学の普及事業の情報機関として 1955 年 12 月に創刊され，1965 年 9 月現在通巻 118 号を記録している。

取扱う分野は農業一般，畜産，林業，家政その他となっている。記事は関係学科の全職員によって

分担されている。同誌は 10 ページのボリュームをもち，月に 4,000 部印刷される。ページ数も発行部数も政府発行の農家の友の半分である。農家の友が一般農家を対象とすれば，農家便りは農業および家政の指導員や農村リーダーを対象としている。そのために農家の友よりも難かしく編集されている。また，実際的な技術情報ばかりではなく，それに関する基礎的資料も掲載される。

農家便りは農業および生活改良普及職員，営農指導員，農林高校の関係職員，市町村役所，末端の普及団体のリーダーなどに無料で提供される。

では同誌に対する調査の結果を考察しよう。

Table 16. The results of questionnaires on NOKA DAYORI.

Question	Answer \ Buraku	A	B	C	D	E	F	Total	%
1. Have you ever seen NOKA DAYORI	Yes	9	24	9	24	23	28	117	28.2
	No	24	55	14	45	46	56	240	57.8
	No answer							58	14.0
	Total							415	100.0
2. How often do you read it?	Every month	0	0	2	4	0	2	8	1.9
	2～3 times/yr.	4	15	8	17	21	22	87	21.0
	4～5 〃	3	3	2	5	4	7	24	5.8
	7～8 〃	2	3	1	0	0	2	8	2.0
	Not at all	9	12	1	5	6	11	44	10.6
	No answer							244	58.7
	Total							415	100.0
3. Where do you read it?	Home	5	10	5	14	12	24	70	16.9
	Community hall	6	9	9	7	7	5	43	10.4
	Village office	0	1	0	2	3	1	7	1.6
	Extension office	0	0	0	0	0	0	0	0
	Friends' house	3	1	1	2	1	6	14	3.4
	No answer							281	67.7
	Total							415	100.0
4. Where do you obtaiu this bulletin?	Extension agents	0	4	1	8	2	5	20	4.8
	Community chief	11	7	12	17	8	17	72	17.3
	Ag. Cooperative technician	0	3	0	0	1	0	4	1.0
	Village office staff	0	2	0	3	2	2	9	2.2
	No answer							310	74.7
	Total							415	100.0
5. Do you understand the stories in it?	Fairly	7	15	10	24	12	24	92	22.2
	Poorly	4	7	1	0	5	4	21	5.1
	Not at all	2	6	1	0	2	5	16	3.8
	No answer							286	68.9
	Total							415	100.0

(To be continued)

(Table 16 の続き)
(on NOKA NO DAYORI) (Continned)

Question	Answer \ Buraku	A	B	C	D	E	F	Total	%
6. Have you applied any of the informations?	Yes	9	17	11	18	17	19	91	22.0
	No	9	20	3	18	11	24	85	20.5
	No answer							239	57.5
	Total							415	100.0
7. Are you satisfied with the number issues?	Increase	12	20	9	17	13	32	103	24.8
	Satisfied	3	10	0	10	4	2	29	7.0
	Don't know							—	—
	No answer							283	68.2
	Total							415	100.0

1) 農家便りを見たことがありますか (Table 16 の質問 1 参照)。

かって農家便りを見たことがあるという人は 415 人の中約 28% で，他の 58% は見たことがない，14% は無回答である。同誌の発行所から読者まで届く過程は次の通りである。まず，農学部普及係から金武村，宜野座村，久志村の三村分として 100 部の農家便りが北部農業改良普及所宜野座支所に直送される。その後の配分は普及所に一任されるが，宜野座村は毎月大体 30 部割当てられている（普及所の資料より)。農家の友が農家約 10 戸に対し 1 部であるが，農家使りは約 20 戸に対し 1 部である。同じ質問に対し，農家使りは 28%，農家の友は約 47% となり，後者は部数が 2 倍あるだけ，見たことのある人の数も 2 倍に近い数に達している。

2) 農家便りはどの位読んでいますか (Table 16 の質問 2 参照)。

これは 1 カ月を単位として年に何回読んでいるかの問である。

415 人の中，年に 2～3 回読むのが 87 人 (21%) で最も多く，毎月読んでいる人は 8 人 (2%) しかいない。毎月 30 部配布して毎月読んでいる人が 8 人しかいないというのはどういうことだろうか。毎月配布を受けている人々が調査からもれているのではなかろうか。農家の友の 3.4% といい，余りにも低い率である。

印刷物は思いの外読まれない。それがその土地の農業や生活の改善に深い関係があってもなかなか読まれないという[3)]。

3) 農家便りはどこで読みますか (Table 16 の質問 3 参照)。

同誌を読む場所として最も多く用いられているのはやはり自宅で，415 人の中，約 17% をしめている。公民館または部落事務所は毎月 4 部平均で 6 部落では 24 部配布されていることになっているが，そこで読んでいる人は約 10% である。友人の家で読むのが 3.4% いる。また，農家の友と同じように普及所は 0 である。

4) 農家便りは誰が届けてくれますか (Table 16 の質問 4 参照)。

トップは公民館長と部落会長を合わせた 17.3% で，普及員が 5% でそれに次ぐ。無回答の 75% は余りにも大きいウェイトであるが，その中には回覧式に受けて誰が届けたかをはっきり知らない人がいるのではなかろうか。役所の職員や営農指導員も低率ではあるが，同誌が動いていることを物語っている。

5) 農家便りの内容はわかりますか (Table 16 の質問 5 参照)。

この問に対して約 30% は回答しているが，他の 70% はしていない。わかりやすいと回答しているのは 415 人の約 22% をしめるが，これは農家の友の同じ項の 29% よりも 7% 低い。これは農家便りは農家の友よりも程度が高いということを読者が意識していることを表わしている。また，この 22% というのは同村への配布部数の 3 倍強の数字になるので，同誌の需要を知るためのいい資料である。

6）農家便りを農業や生活面に応用したことがありますか（Table 16 の質問 6 参照）。

これは，かって農家便りの記事のどれかを，農業や生活の面で応用したことがあるかの問である。415 人の中，22% はあるが，20.5% はない。他の 57.5% は無回答である。応用率においては農家の友が 1.6 倍も高くなっている。

相手が応用することを期待する前に考えねばならないことは，内容の専門事項が実際的，かつ有意義なものであるかどうかということである。アトラクティブの表紙や写真のあるなしにかかわらず，そのような条件を備えていれば印刷物はよく読まれるものである[5]。見て楽しく，読んで読みやすいものであれば，なお効果的である。

米国において 13 州を対象に行なった普及方法の効果の調査研究によると，農業技術の 6% と生活技術の 8% は普及冊子の影響をうけた[5] ことになっている。

7）農家便りの配布部数について（Table 16 の質問 7 参照）。

415 人の中，約 25% は増部することを望み，7% はそのままでいいと答え，残りの 68% は無回答である。68% も無回答がいるのは同誌が広く一般の人に知られていないことを意味するものと思われる。

なお，1）でも述べたように同村への配布量は月平均約 30 部となっている。それは約 20 戸の農家に対して 1 部の割当である。このように部数が少ないので，特定の関係指導者の他は，普及団体，公民館などの組織を通して供覧するようになっている。もっと部数をふやして多くの人に読ませる必要がある。

6. その他の農業関係雑誌

琉球における 2 大農業普及誌——農家の友と農家便り——が無料で提供される半面，どんな農業関係雑誌がどの位購読されているかを調べてみた。

Table 17. Numbes of commercial magazines of agriculture.

Magazines \ Buraku	A	B	C	D	E	F	Total	%
Ienohikari	9	18	8	28	17	22	102	24.6
Poultry	0	0	0	1	0	3	4	1.0
Horticulture	0	2	0	0	1	3	6	1.4
Others	1	0	0	3	2	2	8	2.0
None	18	48	10	24	22	29	155	37.3
No answer							140	33.7
Total							415	100.0

1）どんな農業関係雑誌を購読していますか（Table 17 参照）。

結果は第 17 表に示す通りで，家の光が圧倒的に多く，415 人中 102 人（25%）いる。その他に養鶏関係や園芸関係があるが，両者とも 1% 程で非常に低い。

経済的な理由もあるが，一般に農家の人は購入してまで雑誌を読むという意欲に欠けている。それ

は昔から見たり聞いたりの技術でなんとかやりぬいてきた自給農業の遺産であろう。ここ宜野座村でも近年立地条件を活かした換金農業が次第に発展してきた。サトウキビは全琉的の傾向だが，特にパインの生産と豚・鶏の多頭羽飼育が目立っている。このように専業的になると，自ずから専門雑誌をとって相談相手にする農家が生まれてくるであろう。

2）次表の項目の中，どれを農業の相談相手として一番好みますか（Table 18 参照）。

現に普及している専門的，または部分的に農業情報を流すメディアを 12 種類列挙し，その中どれを農業の相談相手として一番好むかを聞いてみた。テレビは現時点では殆どがいとうしないが，将来はありうるものと仮定して項目に加えた。

Table 18. Number and order of preference as agrieultural information media.

Media	No.	%	Order
Radio	121	29.1	1
Newspaper	47	11.3	2
Television	41	9.9	3
IE NO HIKARI	34	8.2	4
Special works	26	6.3	5
NOKA DAYORI	21	5.1	6
NOKA NO TOMO	19	4.6	7
Others	12	2.9	8
Horticulture	3	0.7	9
Poultry	2	0.5	10
No answer	89	21.4	
Toatl	415	100.0	

この問に対し 415 人の中 326 人（約 78.6%）の人が意志表示を行なっている。その順位と比率は次の通りである。1位：ラジオ—29%（121），2位：新聞—11.3%（47），3位：テレビ—9.9%（41），4位：家の光—8.2%（34），5位：農業専門書—6.3%（26），6位：農家便り—5.0%（21），7位：農家の友—4.6%（19），以下省略。

ラジオは圧倒的な人気でトップにランクし，次点の新聞の2倍の点数をかせいでいる。新聞と3位のテレビは殆ど同点である。印刷メディアのトップは新聞で，それに次ぐのが家の光となっている。農業専門書が，専門の普及冊子をしのいで5位にランクしているのも興味深い。これからすると専門普及冊子の農家便りや農家の友は読者の要求に応ずるべく，もっと内容を充実させるとともに，読ませる工夫を考えるべきである。養鶏や養豚の専門雑誌が最下位に属するのは，その関係の専業農家が少ないことを証明するものである。

電波メディアと印刷メディアを比較すると前者の方に人気がある。聞くことは読むことよりもパーソナルであるという事実の現われであろう。テレビジョンが農業面へのサービス活動を殆ど行なっていないにも拘らず，3位にランクされている事はそれに対する農家の期待が如何に大きいものであるかをうかがわしめるものである。

V 摘　　要

1．宜野座村における農業情報メディアの普及とそれに対する農民の態度についてアンケート調査を行なった。

2．全村の農家 640 戸にアンケートを配布して回答を依頼したが，回収率は約 65% にとどまった。それでこの調査は 65%，即ち 415 戸を対象とする。

3．調査の結果はすべて 1965 年 9 月 1 日現在とする。

4．テレビジョンをもっている農家は 415 戸の中 59.3% である。テレビジョンによる農業教育番組を希望する者が 415 人の中，73.5% もいる。

5．ラジオをもっている農家は 415 戸の中，86.5% をしめている。

6．ラジオの話の内容がわかりやすいとする者は 415 人の中， 52% で， その他はむずかしいとか，わからない人たちである。

7．ラジオの話を農業に応用したことのある人は 415 人中，45% をしめている。

8．新聞を購読している農家は 415 人中，約 64% をしめている。

9．新聞の農業記事の内容がわかりやすいとする者は 415 人中 45% である。

10．新聞記事としては普通の農民の成功物語よりも，科学的な新技術の紹介を好む人の数が少し多い。

11．宜野座村におけるラジオと新聞の比率は 1.7：1 でラジオが多い。

12．琉球政府農業改良課発行の月刊普及誌農家の友は6か年以上の発行歴をもつが，それを見たことのある人は 415 人の中，47% しかいない。

13．農家の友は約 10 戸に 1 部の割当で，毎月読んでいる人は 415 人の中わずか 3% である。

14．農家の友の記事がわかりやすいとする人は 415 人の中 52% で，半分以上の人がよく読解していることになる。しかし，この比率は新聞の同じ項目よりも 16% 低い。

15．農家の友の発行部数をふやすことを望む人は 415 人の約 42% に達している。多くの人に読んでもらうために現発行部数を拡張することが望ましい。

16．琉球大学農学部発行の月刊普及誌農家便りは9か年余の発行歴をもつが，それを見たことのある人は 415 人の中 28% しかいない。

17．農家便りは農家戸数約 20 戸に対して 1 部の割であるが，毎月それを読んでいる人は 415 人の中約 2% にすぎない。年に2～3回読むのが約 21% で，最も多いグループである。

18．農家の友も農家便りも自宅で読む人の数が多い。それに次ぐのが公民館である。

19．農家便りの内容がわかりやすいとする人は 415 人の中約 22% である。その他はむずかしいとかわからないとする人たちである。

20．農家便りを農業や生活面に応用したことのある人は 415 人中，約 22% である。これは農家の友より約 14% 低い。

21．農家便りの現行発行部数をふやすことを望む人は 415 人中，約 25% である。みたことのある人が極少であることと，リーダー育成の見地からもっとふやすことが望ましい。

22．購読されている農業雑誌の中，最も多いのは家の光で 415 人の 25% をしめている。養鶏や園芸などの専門雑誌は 1% 程度で非常に少ない。

23．農業の相談相手としていちばん好まれているのはラジオで，415 人中約 30% の人がそれを選んでいる。次は新聞，テレビジョンの順である。農業雑誌でいちばん好まれているのは家の光で，全体の4位で，テレビジョンに次ぐ。

参 考 文 献

1. Emery, F. E. and Oeser, O. A. Information, Decision and Action, Melbourne University Press.
2. Kelsey, L. D. and Hearne, C. C. 1963. Cooperative Extension Work, 3 rd Edition, Comstok Publishing Associates, New York.
3. 野村春二 1958. 普及技術. 全国農業講習所協議会.
4. 清水幾太郎編 1955. マス・コミュニケーション講座 I. 河出書房.
5. Smith, C. B. and Wilson, M. C., 1930, The Agricultural Extension System of the United States, John Wiley and Lons, New York.
6. 村勢要覧 1963. 宜野座村役所.
7. 東京社会科学研究所編 1959. マス・コミュニケーション読本. 東洋経済新聞社.
8. Wilbur Schramm 著，崎山正毅訳 1962. マス・コミュニケーションと社会的責任，日本放送出版協会.
9. Wilson, M. C. and Gallup, G. 1955. Extension Teaching Methods, U. S. Department of Agriculture.

Summary

1. Studies on the development of main agricultural information media and on the attitude of farmers for them were made in Ginoza-son (village).
2. One copy of questionnaire was given to each of all farm families of 640 in the village, and 65% (415 copies) was collected. Therefore the analysis is on the 65% families or farmers.
3. The studies were made from September 1 to Nevember 30, 1965.
4. Among the farm families, 59.3% has own television set, and 73.5% wants to have agricultural education program on television.
5. Among the farm families, 86.5% has own radio set.
6. Among the farmers, 52% understands the agricultural information well on radio and the others find it difficult.
7. The number of those who have experiences of adoption of radio talks on their farm practices consists of 45% of the farmers.
8. About 64% of the farm families takes news paper.
9. About 45% of the farmers understands agricultural news stories well.
10. The number of those who prefer the seientific technical information on agriculture outnumbers a little that of those who prefer the successful story of general farmers.
11. The ratio of number of radio sets and news papers read there is 1.7 : 1.
12. The monthly extension bulletin NOKA NO TOMO issued by the Section of Agricultural Improvement, Government of the Ryukyus has been published for more than 6 years and given to farm families without charge. But, it's existence is known by 47% of the farmers yet.
13. For about 10 farm families, 1 copy of NOKA NO TOMO is given generally. According to the results of this investigation, only 3% of the farmers are used to read it every month.
14. Those who read and understand well the NOKA NO TOMO consists of 52% of the farmers. But the percentage is lower than that of those who read and understand similar information on news papers.
15. Among the farmers, 42% wants to increase the circulation of NOKA NO TOMO so that more people may be able to have a chance to read it.
16. The monthly extension bulletin NOKA DAYORI issued by the College of Agriculture, University of the Ryukyus has been published for more than 9 years and given to rural leaders and farmers without charge. But, it's existnce is known by only 28% of the farmers.
17. For about 20 farm families, 1 copy of NOKA DAYORI is given generally. But, the number of those who are used to read it every month is 2% of the farmers only.
18. Both the NOKA NO TOMO and the NOKA DAYORI are read mostly at home being seconded by the community hall.
19. The number of those who understand the information in NOKA DAYORI well consists of about 22% of the farmers. The others find it difficult.
20. Among the farmers, 22% has experiences of adoption of the information in NOKA DAYORI upon farm and home living practices. This is about 14% lower than that case of NOKA NO TOMO.
22. IE NO HIKARI is more popular among all kinds of commercial agricultural magazines consisting of 25% of the farmers. Poultry and Horticulture magazines are read by only 1%.
23. Radio is prefered first among above mentioned media for getting agricultural information consisting of 30% of the farmers. The news paper and television follow it. IE NO HIKARI ranks the 4th consisting of 8.2%, and the first among the agriculural magazines.